



2017 年 (平成 29 年)
3月号 (No. 862)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

医療委員会主催で「膝痛の予防と対処」講演会を開催

永年にわたる重荷を背負つての長時間・長期間歩行……。膝のトラブルに悩まされる登山者は多い。それを受けて先ごろ、医療委員会の主催で「登山者に役立つ膝の痛み・トラブルの予防と対処」という講演会が開催された。参加できなかった会員のために、そのダイジェストを報告していただいた。

医療委員会担当理事 野口いづみ

2017年2月16日、千駄ヶ谷の東京体育館で日本山岳会・医療委員会主催で講演会「登山者に役立つ膝の痛み・トラブルの予防と対処」が開催された。定員100名で募集したが、参加者は117名と、会場は満員になった。遠方からの参加者もあり、膝のトラブルに悩む登山者が多いことがうかがわれた。117名の内訳は会員が

34名、会員外が83名と、会員外が7割以上を占めた。

膝関節の構造と痛みの原因

講師は聖マリアンナ医科大学整形外科学講座講師で、膝関節外来を担当している小林哲士先生だった。月350人の患者さんを診察しており、手術症例も多いそうで、新進気鋭の膝のエキスパートだ(写真1)。

目次

医療委員会主催で「膝痛の予防と対処」講演会を開催	1
北大山岳部ゆかりの人々	4
第21回植村直己冒険賞、平出和也さんが受賞	6
連載 日本山岳会とヒマヤン・クラブのこと	7
追悼 船村 徹先生を悼む	8
東西南北	9
活動報告	10
図書委員会/山行委員会	
支部だより	12
群馬支部	
新入会員	13
図書紹介	14
図書受入報告	15
会務報告	16
会員異動	17
ルーム日誌	17
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時



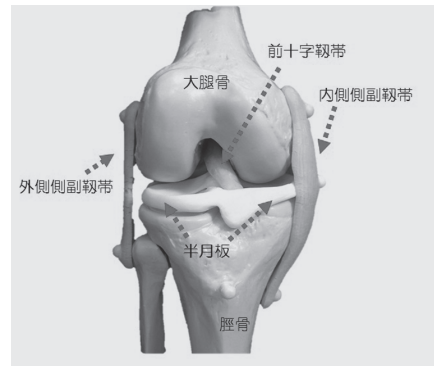
(写真1) 講師の小林哲士先生

小林氏はず、膝関節の構造を示し、最低限知っておいてほしい各部の名称を説明した。太ももの骨が大腿骨、すねの骨が脛骨、靭帯は4つあって膝の内側、外側、前と後ろの十字靭帯、それに大腿骨と脛骨間のクッションの半月板だ(写真2)。

痛い部位を把握することからすべてが始まるという。つまり、痛みの部位は関節内と関節外に分け

られ、それぞれに原因が異なる。関節内の痛みは軟骨・骨、靭帯、半月板の損傷が原因で起こる。関節外の痛みは驚足(膝下の内側)、腸脛靭帯付着部(膝の外側)、大腿四頭筋腱(膝の上)、膝蓋下脂肪体(膝の下)の炎症で起こるという(写真3)。痛みがどこで、原因が何か把握できれば解決策は決まるということ、意外と容易な解決策がありそうだ。

続いて、登山と膝関節痛のテーマになった。太ももの後ろにある筋肉のハムストリングは膝を曲げる作用があるが、下りでハムストリングが緊張しやすい(図1)。ハムストリングが脛骨に付着している部位を驚足といい、ハムストリングの過緊張によって驚足炎が起る。このような関節外のトラブル



(写真2) 膝関節の構造

ルの対策は、体重と荷加重を減らし軽量化することと、きれいに歩くことだという。腰が後ろに引けていると、ハムストリングをはじめ大殿筋（お尻の筋肉）や腸腰筋（骨盤の内側から大腿骨に付着する筋肉）など股関節周囲の筋の負担が増加してしまう。横から見ても、肩、骨盤、足首のラインがまっすぐになっている歩き方が良いとのこと。

膝関節痛の対処法

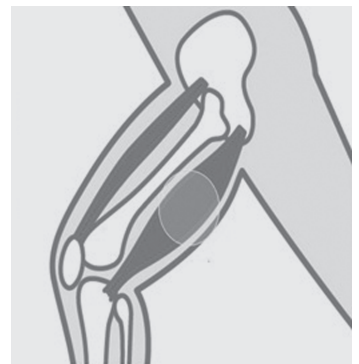
膝関節痛の対処法としては、専門医療機関を受診することと断定した。痛みについては原因の正しい分析が大切で、様々なケースがあるので、診察を受けて個別的に治療を進めることが必要とのこと。なお、関節外の痛みは膝関節の周



(写真3) 膝関節外の構造

囲の筋肉の使い方、歩き方を注意するだけで解決する場合もあるという。たとえば、ハムストリングの緊張を取るためのストレッチとして、開脚してなるべく良い姿勢で前屈する方法が有効だ(写真4)。また、普段の歩き方にも注意すると良い。膝を曲げて歩くとハムストリングに負担がかかりやすいので、平地では膝を伸ばして、踵から着地すると良いそうだ。

登山中に膝が痛くなってしまった場合の対策は、安静にし、悪化する場合は助けを呼び、なんとか歩けそうな場合は無理せず歩くこと。即効性のある鎮痛薬を使うのも有効で、薬としてアセトアミノフェンや非ステロイド性鎮痛薬がある。内服後15〜30分で効果が得られる。基本的には食後に飲むか、



(図1) 下りにおけるハムストリングの動き

胃薬と一緒に飲むと良い。続けて飲む場合は6時間空ける。喘息のある人は発作を起こす場合があるので注意する。いずれにせよ、登山中にできることはあまりなく、十分な筋肉を付けておくが大切とのこと。

登山者がよく使う膝痛対策として、サポーター、ストック、テーピングに触れた。柔らかいサポーターは歩行に伴う痛みは軽減するが、これは痛みを感じる閾値（いきま）を上げて、痛みを感じにくくさせるためらしい。しかし、使つて悪くなるといったことはないが、機能障害の改善は期待できないとする報告が多いようだ。サポーターも痛みは取れるが、研究中とのこと。サポーターとサポータイトイツについては、登山者の立場からもう一步踏み込んでほしい感じがした。

ストックは有効で、膝関節と股関節への荷重を大幅に軽減できる。なお、ストックは膝の痛みのある反対側の手に持つとバランスを取りやすい。テーピングは30分かつ1時間程度しか効果が期待できず、長時間効果を得たい場合には、巻き替えが必要とのことだ。

膝関節痛の予防法

登山者に必要な膝関節痛の予防としては、正しい姿勢と歩き方、膝関節と股関節周囲の筋力を強化し、かつ柔軟性を高めること。柔軟性のある良い筋肉にするためには、ストレッチをして伸ばす必要がある。つまり、筋トレとストレッチはワンセットと考えられ、ストレッチの必要性が強調された。なお、筋トレは90歳まで効果があるので、高齢者もぜひ筋トレしてほしいとのこと。サプリメントは栄養補助食品と考えて、食事はバランス良く摂取し、特に蛋白質、つまり大豆、魚、肉を取ることが重要だそう。

登山のためのトレーニングとして、ジョギング、筋トレ（特に大腿四頭筋）、ある程度の頻度での登山を挙げた。大腿四頭筋の筋トレにはスクワットが有効で、大殿筋や



(写真4)開脚前屈のストレッチ

ハムストリングも鍛えられる。腸腰筋の筋トレは、寝た状態で足を上げると良いそうだ(写真5)。また、自分なりの体づくりの目的、つまり、筋力を付けたいか、持久力を付けたいかで方法が異なる。1RMとは1回だけ運動を行なうことができる運動強度で、「太マツチョ」を目指す場合は1RMの60〜65%の強度が必要だが、「細マツチョ」を目指す場合は、強度よりも12〜20RMと回数を増やすことが必要だ。25RM以上では筋肉の増加効果はないとのこと。最近、筋トレは8〜10回程度の1セットで良いとされているそうだ。トレーニングの頻度は、次回の運



(写真5)脚挙げによる腸腰筋の筋トレ

動との間は48時間開けることが推奨されており、筋力増強には最低週2回必要で、週3回が適当とのこと。
最後に、膝関節の治療の実際、脛骨骨切り術、ヒアルロン酸の関節腔内注射、人工膝関節置換術などについて、動画も用いて紹介した。なお、寿命に影響する因子として変形性膝関節症は最も影響力が大きく、以下、糖尿病、喫煙、骨粗鬆症の順で、膝関節痛を予防すると、長生きが期待できるそうだ。
「分かりやすく有効」と高評価

講演中に随時、質問を受けたが、講演会の最後に30分ほど、質疑応答を行なった。多くの質問があったが、質問者は膝の手術を受けた方が多かった。ケースは様々で、対処法も多岐にわたるものだったが、小林氏はてきぱきと明快に回答した。質問者に不安を抱かせるような対応は避けるという配慮があり、このことは講演が分かりやすいことに反映されていたと思われる。
最後に、医療委員会・浜口委員長が「本日はいかに膝をいたわりながら、山を楽しむかというお話を聞きました。会場の方は膝の悩みを解く方法を、医療相談のお金を払わずに聞けたということで、本日の最大のベネフィットではなかったかと思いますが」と挨拶し、講演会は終了した。

終了後、アンケート用紙を87名の参加者が提出した。性別は男性52名、女性34名、不明1名だった。年齢は30歳台3名(会員0名)、40歳台13名(1名)、50歳台31名(5名)、60歳台22名(9名)、70歳台15名(7名)、80歳以上3名(3名)で、若い方は会員外が多かった。講演会を知った媒体については、日本山岳会か医療委員会のHPが最も多く(35名)、以下、口コミ(23名)、山と溪谷社の本またはウェブ情報(14名)で、会報は10名と少なかった。

評価は1の「とても良かった」が51名、2の「良かった」が34名で、3の「普通」と4の「あまり良くなかった」はなく、無記入が2名だった。

た。感想は「懇切丁寧で分かりやすく、有効だった」というものが多く、「講師がフレンドリーで、双方向性が満足した」などもあった。「配布資料をもっと詳しく」や「もう少し登山に特化してほしい」などという反省すべき感想もあった。

今後、希望するテーマとして、体力づくり、筋トレ、腰痛、高血圧・不整脈などの病氣、ハチ刺され、熱中症・低体温症、登山と長寿などが挙げられた。これらのアンケートを参考にして、関心の高い医学的テーマについて講演を行ないたいと考えている。

なお、『山と溪谷』3月号で特集「悩める膝 予防と対策」が組まれ、小林氏が座談会・診察会に登場している。個別症例について、原因と筋トレの仕方などをアドバイスしている。併読されると分かりやすいだろう。

講演の模様を収録したDVDを希望される方は、医療委員会(yamayou@yahoo.co.jp)へご連絡いただきたい。参加委員は、小林先生と同郷の熊本から馳せ参じた土井理氏など7名と奈良千佐子さんだった。ご協力に感謝したい。

HISTORY

北大山岳部ゆかりの人々

創立90周年記念祝賀会に出席して想う

芳賀孝郎

2016年11月6日、東京・神田の学士会館で開催された北大山岳部創立90周年記念式典と祝賀会に出席した。

北大山岳部は、1912（明治45）年創立の北大スキー部から1926（昭和元年）年、分離独立して創立された。北大山岳部創立90周年記念海外遠征史「寒冷の系譜」にあるように、北大山岳部は北海道の未知の山々、特に中央高地の大雪山系や日高山脈に四季を通して登頂を果たし、北海道の厳しい「寒冷と雪氷の冬期登山」に力を注いできた。

北海道の冬期登山の実績が1980（昭和55）年の厳冬期、ネパール・ヒマラヤのバルンツェ峰登頂に発揮された。続いて1982年には、8000m峰のダウラギリI峰の冬期初登頂に成功した。まさしく「寒冷の系譜」である。北大山岳部はまた登山のみならず、南極探検や学術調査でも貴重な記録を残している。

今回の祝賀会で、私は北大山岳部の山「ペテガリ岳の冬期初登頂者である今村昌耕氏（98歳）にお会いできた。そのことが感激であった。

1940（昭和15）年、ペテガリ岳を目指した北大山岳部は、コイカクシユサツナイ岳からの雪崩に遭遇し、8名が亡くなった。当時としては国内最大の山岳遭難事故であった。その翌年の5月、今村は住吉省三とともに積雪期ペテガリ岳初登頂に成功した。さらに今村は1942年1月、佐藤弘とともに厳冬期のペテガリ岳登頂を、イグルーからのラッシュ・アタックで果たした。

高齢にもかかわらず祝賀会に出席して挨拶される今村氏の姿は、ペテガリ岳を冬期初登頂した人というよりも、山を愛する一人の優しい人に見えた。

北大山岳部ゆかりの人に関わる

思い出を綴ってみたい。学生のころ、私が所属する学習院山岳部・山桜会の集会で会長の松方三郎が、学習院の同期で北鎌尾根や冬の燕岳などをともに登った「ワンデール」こと板倉勝宣について、山とスキーに対して高い情熱を持って北大スキー部に入部したことなどを折に触れて話していた。

板倉は北大スキー部の仲間とともに1921（大正10）年1月、無意根山、余市岳にスキーで初登頂しているこの年、アルプスでは横有恒がアイガー・東山稜を初登攀。翌年には旭岳や黒岳、芦別岳その他のスキー登山に成功した。日本のスキー登山の先駆者であり、北海道の冬山登山のパイオニアであった。

その板倉は1923年1月、立山・松尾峠で横有恒、三田幸夫とともに猛吹雪に遭遇し、遭難した。板倉は横に抱かれながら亡くなった。私は岳父・三田幸夫から板倉との初対面の印象や人となりをよく聞いていた。

1982年6月に、北大スキー部創立70周年記念祝賀会が札幌グランドホテルで開催された。その



90周年実行委員長・住吉幸彦氏と今村昌耕氏（右）

とき私は、北大スキー部長を18年間務めた大野精七先生からの招待で岳父（当時82歳）と一緒に出席し、古い仲間と楽しく交流した。その帰り道、大通公園を散策して、偶然にも黄昏込める手稲山に出会った。岳父は手稲山をじっと眺めていた。すると、板倉が愛唱していたシューベルトの「魔王」をドイツ語で歌い始めた。その目は、松尾峠の幻影を思い出しているようであった。

三田幸夫は札幌に来るたびに、いろいろな人に会いたいと私に注文した。その多くが北大山岳部OBの仲間であった。1人目は北大名誉教授・舘脇操だった。舘脇と



積雪期のベテガ岳へ(写真=有波敏明)『北大山岳部々報』第8号より

三田は神中(横浜一中)の同期で、中学時代に箱根の山々を登った仲間である。

1925(大正14)年秋、三田はカナディアン・ロッキーマウンテン・タタラ登頂報告会をするために、岡部長量と二人で札幌にやって来た。大酒飲みの二人は一晩で旅費を使い果たし、宿賃がなくなった。困り果てた三田は錦脇にお願ひして、恵迪寮にお世話になった。そういう間柄であった。

2人目は北大山岳部創立者の一人である伊藤秀五郎先生であった。伊藤はやはり神中の5年後輩であった。私は三田に同行して伊藤のお見舞いに出かけた。そのとき格

好良い紳士の伊藤は痛々しい姿であり、会話は筆談であった。

3人目が坂本直行、4人目は橋本誠二(ヤンチョさん)、5人目は山崎英雄(クンクンさん)であった。

*

我が家にお招きしたこうした方々との山の話で、三田は大喜びであった。錦脇先生は直行さんとそばの食比べをしたことを話し、直行さんの大飯食いの話で盛り上がった。直行さんは日高の山々を知り尽くしていた。その風景が彼の頭の中にインプットされていたので、「三田さん、私の日高の山々の絵がお好きなら、春夏秋冬、好きな季節の絵を描いて差し上げると言っていた。

橋本ヤンチョさん(第3次マナスル先遣隊員)は、山スキーの名手である。あるとき、東大スキー山岳部OBの渡辺兵力さんからスキーの挑戦を受けたが、結果は引き分けであった。兵力さんらしい愉快な行動と思った。私は2回ほど兵力さんとスキーをしている。橋本ヤンチョさんは、スキー理論とお酒の好きな、遠来の兵力さんに花を持たせたいように思った。

山崎クンクンさんは、第1次マ

ナスル登山隊員(隊長・三田幸夫)である。三田はマナスル仲間の山崎と会ったのをいつも喜んでいて、クンクンさんもスキーの名手である。

私は札幌・円山の頂上から林間を二人で滑り降りようと、同行したことがあった。山崎さんの後に続いて林間を滑った。7、8本の林間を抜けては転倒する私を見て、クンクンさんは「大丈夫か」と声を掛けられた。私はXCスキーだったので、無念な思いをしたことがあった。

三田は自分から話をする事は少なかった。しかし、パイプを銜えて、ゆったりとした姿勢で仲間の話を聴くのが得意であった。私は岳父のお供で北大の大先輩と交流ができたことを、このたびの北大山岳部創立90周年記念祝賀会で改めて思い出し、感謝している。

*

山崎クンクンさんについて少し話を追加したい。その後、三田は横浜から札幌に移り、1989(平成元)年から我が家の近くの宮の森病院に入院していた。

ある冬の日、山崎さんは三田のお見舞いにやって来た。その服装

は山スキーヤーのスタイルであった。三田を車椅子に乗せて三角山の斜面が見える窓辺に連れて行き、林間の斜面にきれいに描かれたシユプールを見せた。「これが私のお見舞いです」と言った。三田は「クンクンは粋なことをするな」と言って笑顔になった。三田は翌年、91歳で亡くなった。

元氣であった山崎さんも92歳になり、耳が遠くなり、会話をするのはなかなか困難になった。山崎さんに会うと、「第1次・第2次マナスル隊員はどうなっているか」と聞かれるのが常である。

私は90周年記念祝賀会に出席した報告の手紙を山崎さんへ送り、その和やかな雰囲気や、今村昌耕氏をはじめ北大山岳部関係120名と各大学山岳部OB、その他マスコミなど80名余が出席したことを記した。その中には、第1次マナスル登山隊の石坂昭二郎氏(89歳、北大山岳部OB)の元氣な姿があったことも伝え、その写真も送った。

春になったら山崎さん宅を訪問し、改めて北大山岳部90周年と日本山岳会のことについて、ゆつくり話し合う予定である。

TOPICS

第21回植村直己冒険賞、平出和也さんが受賞

第21回となる2016年の「植村直己冒険賞」は、平出和也さん(37歳、日本山岳会会員、東海大学山岳部OB)に授与された。

去る2月16日、植村さんの母校である明治大学・紫紺館で記者会見があり、主催者の兵庫県豊岡市から発表された。平出さんは、アルパイン・クライマーと山岳カメラマンの二刀流で活躍中(8000m峰5座、エベレスト3回登頂)で、授賞理由は、

「困難な未踏ルートにこれまで多数挑戦し成功してきたと同時に、登攀技術、撮影技術の両方が高く評価され、他の登山家の記録を撮影する。日本人のみならず、これまでフィンランド人やアメリカ人などの登山家の冒険に同行し、撮影という形でサポートしている。撮影に使用するギアも自作・改良し、独特な撮影を実践している」。

選考委員(国立民族博物館名誉教授・石毛直道氏、作家・椎名誠氏、作家・西木正明氏、京都大学総長・山際壽一氏、豊岡市長・中貝宗治氏)を代表して西木氏は、

「ハイレベルなクライマーであり、山岳カメラマンとしても大活躍されている。私もマスコミにいたが、カメラマンの苦労は並大抵のものではない。文句なしに『恐れ入りました授賞』である。選ぶ側にとっても嬉しかった」と述べられた。

さらに「ある意味、冒険も新しい時代に入ったと思う。冒険が大掛かりなパーティではなく、いつそ個人的なものになっている。ごく普通の人が、さりげなくハイレベルな登山を実践している。今までより可能性が広がったのではないかと」。

中貝市長は、
「植村さんは自分の脚で世界を歩いて、そこで体験したものを私たちに伝えてくれた。平出さんはクライマーとしての評価は言うまでもないが、一般の人々が容易に見られない世界を、カメラの眼を通して我々に提供してくれている。新しい地平を切り開かれたと思う」と語った。

これに対して平出さんは、
「ありがとうございます。私は



植村直己冒険賞の発表記者会見でコメントされる平出和也さん

自分自身のために登山を続けてきたが、少しは人のためになつていたことを知って嬉しく思う。

一流の冒険家と行動をともにするということは、彼らがどういう判断をするのか学ぶところが多い。記録撮影も大切だが、自身のスキルを上げるために活動している部分もある。海外のエクストリームな映像にあこがれて撮影にも取り組んでいるが、私の記録したものに對して、若者が『かつこいな、自分らしい冒険をしたいな』な』と思ってくれば大変嬉しい。いずれにしても、遭難で何人かパートナーを失っているし、私の活動をサポートしてくれている

人々も含めて、仲間と一緒に賞をいただいたと思っている」と述べられた。

平出さんは2015年12月、当会の年次晩餐会において「世界的な山岳登攀と独自の技法による撮影実績」を評価されて「第17回秩父宮記念山岳賞」を受賞しているが、彼の名を高めたのは、2008年のカメット(7756m、インド・ヒマラヤ)南東壁の初登攀である。今は亡き谷口けいさんとのペアで成し遂げられた登攀で、これによりピオレドール(黄金のピッケル)賞を受賞している。

この夏は、カラコルムのシスパーレ(7611m)に再挑戦する。「自分の山を見つけない」との思いでいろいろ探してきたが、この山なら自分の人生を懸けても登りたい、と言う。2002年に出会い、07、12、13年と挑戦しているが敗退。「僕の人生で1つくらい登れない山があってもいいのではないか」と平出さんは言うが、果たして結果やいかに。

なお、授賞式および記念講演会は9月30日(土)、植村さんの故郷・豊岡市で行なわれる。

(節田重節)

連載 日本山岳会とヒマラヤン・クラブのこと

3 HC 創立90周年記念行事

沖 允人

2017年1月にHCのムンバイ本部を訪問した。事務所内はHCによるヒマラヤ登山やHCの歴史を語る写真などがたくさん飾られ、5年前に訪れたときとは見違えるように綺麗になっていた。創立90周年記念に公募した新しいHCのロゴが決定したばかりであった。事務所は総会・セミナーの準備で忙しくしていたが、副会長 Divyesh Muni 夫妻と事務局長 Ms.Nandini Purandare に対応していただい、刷り上がったばかりの総会議次第と案をいただいた。それによると左記のように決まるようであった。

毎年2月に開催される Annual Seminar は、2017年も18日と19日に、創立90周年の会を兼ねてムンバイ市内の Kishinch and Cellaram College の Rama and Sundri Watmull 講堂で開催される。18日は年次総会も兼ね、会長は T anil Kiliachand、副会長は Divyesh Muni と Motup Chewang と Dr.Kallol Das び、財務担当は

Deepoak Bhaimani、事務局長 (H J 編集長) は Ms.Nandini Purandare、委員は14名と予定されている。

セミナーは、メインゲストとしてイギリスのクライマー Leo Houlding が36年間にわたる冒険・登攀について話し、イギリスの Doug Scott が『Hard Road to Everest』の著書に対して、Kekoo Naorji Book Award (2016) を授与され、また、『A Crawl Down the Ogre』と題してイギリス隊がカラコルム・Baintha Brakk (Ogre, 7285 m) 初登頂の講演をする。Sir Christian John Storey Bonington と D.Scott が1977年に初登頂してから2017年が40周年になる。夕食会は別の場所で開催される。HCの事務所が午前中を過ぎた後、HC記念の楯をいただき、前 H J 編集長 G Harish Kapadia や宅へ、Divyesh Muni 夫妻と Ms.Nandini Purandare と一緒に、奥様の手料理による昼食会に招待された。

食後 Kapadia さん、Divyesh Muni さんとともに編集委員である『インド・ヒマラヤ』(J A C 110 周年記念出版)の改訂版や英語版の検討をした。『インド・ヒマラヤ』も必要な部分は英語に訳して読むことはできる。しかし、完全な翻訳になっているか、また、版權の問題もあるので、英語版がある方が良く、全文でなくても山名解説の部分だけでも、ということで見は一致した。帰国後検討する課題となった。

創立90周年記念行事の話になり、すでにバンフ山岳映画祭のインド国内巡回上映が始まっており、創立80周年記念のときに行なった10日間程度のヒマラヤ・トレッキングも計画中であるという。

HCを訪問した数日後、ダライ・ラマ殿下を訪ねる旅の計画が実現可能となり、左記のような案内が送られてきた。J A C 会員で参加希望の方は、至急Eメールで問い合わせされるとよい。HC事務局 : info@himalayancub.org または事務局 Ms.Nandini Purandare : nandini.purandare@gmail.com 創立90周年記念の旅計画(2017年4月22-26日)は、4月24日

(月)の午前9時からダライ・ラマ殿下 (His Holiness The Dalai Lama) に、居所の Dharamsala で拝謁できる許可が得られ、Himachal Pradesh の McLeodganj に23日に集合して、Dharamsala 周辺の散策とダライ・ラマ殿下訪問を行なう希望があれば、Delhi-Dharamsala-Delhi の交通と旅行の手配が可能である。

*

その2週間後、私が日本に帰る直前に創立90周年記念コルカタ・セミナーが開催された。会場は市内のロータリー・クラブのセミナー・ハウスの講堂であった。講演者は3名で、私の「日本の登山界のこれまでとこれから」という講演、著名な写真家 Shishinatha Basu 氏の「Digital India」という映像中心のトーク、HC役員でコルカタ支部長の Debabrata Mukherjee 氏(『インド・ヒマラヤ』の編集委員)によるガルワールの困難なコースの探索報告「Tracing the dots of my mentors: Shipton, Tilman, Meade」であった。講演者には花束と記念の楯が贈られた。出席者は約220名で、午後6時から9時過ぎまで講演があった。



船村徹先生を悼む

尾上昇

船村先生から「会いたい」とお誘いを受けたのは、2009年の11月であった。JACが中心となつて「山の日」の制定に動いていることに関心を持たれたのである。担当常務理事の成川隆顕さんにご同行を願った。

船村先生は、山や自然に深い愛情を抱いておられる。「山の日」については、以前からその制定を訴えられていて、地元栃木の下野新聞

追悼 OBITUARY



船村 徹 (ふなむら・とおる)

会員番号14674

1932(昭和7)年6月、栃木県塩谷町生まれ。作曲家。「別れの一本杉」「王将」などのヒット曲を生む。日本音楽著作権協会会長、横綱審議委員会委員を歴任。2008年、下野新聞のコラム「針路」で「祝日『山の日』をつくろう」と提唱。2012年の「山を考へる・東京会議」で「山は心のふるさと」と題して講演(写真)。2016年、文化勲章受賞。

に客員論説委員として意見を發表されたり、周りの人に必要性を説いたりされている。生まれ育った栃木県塩谷町の自然への想いは強く、福島原発事故で発生した指定廃棄物の処分場問題では、「故郷の山や川を汚してはならん」と住民の反対運動を支持したという。3人とも酒が強い。話は弾み、あつという間の2時間であった。酒の勢いも手伝って、最後に私は図々しくも2つのお願いをした。1つは、JACへの入会。もう1つは、「山の日」が制定された折の

「山の日の歌」の作曲依頼である。「うんうん」と頷いておられたがそれ以上は進まず、唐突なお願いだったかと、しばし戸惑っていた。年明け早々、先生から私宛に一通の封書が届いた。入会申込書である。忘れてはおられなかったのだ。私と成川さんの紹介者サインで入会。その年の年次晩餐会では、新入会員代表のご挨拶をお願いした。ご存じのとおり先生は、錚々たる多くの肩書を持っておられる。それ以後、そのなかの一つに「日本山岳会会員」が記されることになった。誠に光栄である。

その後の「山の日」の制定運動である。成川さんの大車輪の活躍で、山岳5団体を中心とする「山の日」制定協議会が発足。これを契機として「山の日」制定議員連盟も結成されて、2014年の5月、国会で国民の祝日「山の日」の制定が決まった。それから間もなくの7月、再度、船村先生からお呼びが掛かった。私と成川さんとお伺いした。作曲界の大御所で、日本音楽著作権協会の会長も務めた先生は、私たちに「山の日の歌」をつくる具体的な手順を語られた。

がましいが、正直、胸に熱いものがこみ上げてきた。以後は成川さんらが窓口になって、のちに財団法人となる全国「山の日」協議会と連携して歌詞の一般公募、作曲家への依頼、レコード化の手配とコトが進んだ。体調を崩されているのか、先生の作曲はなかった。2016年8月11日、国民の祝日「山の日」が施行された。それに先立つて8月8日、東京で、船村先生総合プロデュースによる「山の日の歌」の発表会が開かれた。この日を待ち望んでいた私は、「先生ありがとうございました」のひと言を申し上げたくて会場に駆けつけた。残念であった。体調不良でご欠席とのことであった。今年1月の文化勲章受章のお祝いの席にも所用で出席できず、私はとうとう御礼を言い損なってしまった。この紙上を借りてなどとは、いささか不遜であるのは承知であるが、それしか機会がない。お許しを賜りたい。

「先生、本当にありがとうございました。今はただ、先生から賜ったご厚情に感謝の念を込め、その御霊安らかなれ、とお祈りするばかりである。(日本山岳会元会長)

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

続・秘峰登山のススメ

〈上〉

西川元禧

昨年、本欄に3回に分けて「秘峰登山のススメ」を掲載したところ、所属する茨城支部をはじめ、他支部会員からも「ほかの秘峰も紹介してほしい」との声が多く寄せられた。その続編として追加した秘峰を紹介したい。

北海道では知床半島の羅臼岳から硫黄岳へ、右手に北方領土の国後島を眺めながら縦走すると、途中の三ツ峰(1509m)、サシルイ岳(1564m)、オッカバケ山(1450m)、南岳(1459m)、知円別岳(1544m)は訪れる登山者は少ないが展望が良く、いずれも秘峰としてお薦めしたい。オッカバケ山と南岳の鞍部には幕営

適地の二ツ池があり、気分の良い風景が広がる。

日高山脈では十勝幌尻岳(1846m)を追加したい。山深い日高で登山口からオピリネツ川に沿って日帰りでピストンできて、頂上からの展望がすばらしい。西に札内岳(1895m)、エサオマントッタベツ岳(1902m)、日高の盟主・幌尻岳(2052m)や戸蔭別岳(1959m)、北西にピパイロ岳(1916m)、南西にカムイエクウチカウシ山(1979m)など、曾遊の山々の眺めはいつまでも見飽きることがない。

世界遺産の白神山地は、登山者の多い白神岳(1235m)を除けば、二ツ森(1087m)、真瀬岳(988m)、小岳(1042m)、冷水岳(1098m)は登山者がほとんどなく、向白神岳(1250m)や尾太岳(1083m)は登山道が

未整備のために、ブナ原生林の中の静寂の山と言える。藤里駒ヶ岳(1158m)は登山口から10分ほどの所に湿原があり、6月のミズバショウ、7月のニッコウキスゲのころは楽しい。秘峰としてお薦めは、頂上直下に池塘が点在する大湿原のある田代岳(1178m)で、夏は高山植物が咲き乱れる。

八幡平は見返峠から頂上(1613m)まで1時間弱で往復し「八幡平に登った」とする人が多いが、広義の八幡平はもつと山城が広く変化に富み、避難小屋が随所にあつて各コースを縦走するのに便利である。

東の茶臼岳(1578m)から黒谷地湿原、源太森(1595m)を経て八幡沼を眺めながら八幡平頂上に到着後、緩やかに下つて蒸ノ湯や後生掛温泉の秘湯で泊まり、焼山(1365m)に登つて岩盤浴で人気の玉川温泉に下るコースがある。

見返峠から南へ畚岳(1578m)、諸檜岳(1516m)、嶮岨森(1448m)、大深岳(1541m)、三ツ石山(1466m)、大松倉山(1407m)と、ほとんど登山者に会わない秘峰を越えて犬倉

山(1408m)、岩手山(2038m)まで続く裏岩手縦走路がある。

松川温泉から源太ヶ岳(1545m)、大深岳を経て、途中踏み跡が不鮮明な所や倒木帯に苦勞し、草原で秋田駒ヶ岳が見えて喜んだりして関東森(1154m)、八瀬森(1230m)、曲崎山(1334m)、大沢森(1178m)など、樹林に囲まれ展望はないが静寂な秘峰を越える。そして、山頂が高層湿原で森吉山も見える大白森(1215m)や池塘の点在する湿原が山頂の小白森(1145m)を経て、さらに2時間歩けば露天風呂

の乳頭温泉郷にたどり着く、南八幡平のコースがある。

朝日連峰の天狗角力取山(1376m)もお薦めしたい。朝日連峰は、まず主稜線を以東岳(1771m)―寒江山(1695m)―竜門山(1688m)―西朝日岳(1814m)―大朝日岳(1870m)―小朝日岳(1648m)―鳥原山(1430m)と縦走したが、2回目以北東の尾根を障子ヶ岳(1482m)から天狗角力取山に進んだ。頂上避難小屋の前には天狗が角力を取った土俵のような広場がある。翌日夜明けに、小屋前からの残雪の主稜線がモルゲンロートに染まる眺めは圧巻だった。さらに湯沢峰(1259m)、二ツ石山(1312m)、高松山(1440m)と進み、三方境で主稜線に合流して翌朝、大朝日岳から南下し頂上直下でウスユキソウの大群落に感動。正面に飯豊連峰を見ながら平岩山(1609m)、北大玉山(1469m)、大玉山(1438m)と人に出会わない秘峰を縦走して、祝瓶山(1417m)から針生平へ下山した。

群馬・新潟県境の谷川連峰は三国峠から三国山(1636m)、大

源太山(1764m)、平標山(1984m)と縦走し、仙ノ倉山(2026m)までは登山者を見掛けるが、エビス大黒ノ頭(1730m)へ歩を進めると、めったに人に会わない。草地の稜線漫步を楽しみながら谷川岳までの間に避難小屋が数箇所あって縦走には便利だ。次の万太郎山(1954m)付近はニッコウキスゲの群落がある秘峰で、大展望が得られる。さらに大障子ノ頭(1800m)、オジカ沢ノ頭(1840m)を経て谷川岳(1977m)。北に茂倉岳(1978m)、一ノ倉岳(1974m)、武能岳(1760m)と進み、蓬峠から七ツ小屋山(1675m)に登ると登山者はいない。北東に巻機山(1967m)や柄沢山(1900m)が近く、西に遠く仙ノ倉山、その奥の苗場山までの大展望を貸切りで楽しめる。秘峰としてお薦めしたい。その先、上越のマッターホルンと呼ばれる大源太山(1598m)は西麓からピストンする人も多い。

新潟県では川内山塊の五剣谷岳(1188m)をお薦めしたい。三百名山の粟ヶ岳(1293m)を除き、地元以外の登山者には川内山

塊の山々はほとんど知られていないので、静かな山行が楽しめる。木六山(825m)からブナ林が広がる七郎平山(906m)を経て展望の良い銀次郎山(1052m)、銀太郎山(1112m)までは夏道がなんとかあるものの、その先は灌

木のヤブが深いので残雪期に登ることになる。五剣谷岳頂上は灌木だが、北側から越えてきた山々が、南側には雪を被った青里岳や矢筈岳、さらに遠く守門岳まで望むことができる。

(4月号に続く)

活動報告

図書委員会

第34回図書交換会報告

図書交換会の第1回の開催は1968年のこと。会報「山」273号(1968年3月)によると、当時の図書委員会で「会員の持っている山岳図書の交換、販売会をやるうではないか」と提案があったという。当時の図書委員長は深田久弥氏で、深田氏は翌4月から、図書委員長兼務のまま副会長を務める、図書委員の山崎安治・小林義正両氏らとともに「古本屋のオヤジよろしく1冊1冊値段を付け

告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

た」という。声を上げたのはよいけれど、いつこうに本が集まらず、大あわてでぎりぎりかき集めたとも報告がある。そのドタバタぶりは50年の時を超えた現代の私たちと同じで、ふつと心が和む。

その後中断して再開したもの、2011年には開催予定(当時はまだルームで開催していた)の8日前に東日本大震災が起った。状況が刻々と変わる中での判断に苦慮しながら、開催を5月に延期したことも記憶に新しい。

そして年次晩餐会に場を移して5年、34回目の今年度の図書交換



年次晩餐会当日に行なわれた図書交換会

会だ。会場の一部に一昨年の11月に亡くなった近藤等名誉会員の本を展示して近藤さんを偲んだ。『処女峰アンナプルナ』から始まり、アルプスの山々の魅力を国内の岳人に届けてくれた近藤さんの足跡を、56冊の著書と訳書でたどって見たのだが、よく見知った本が並ぶ中に『エヴェレストの頂上へ』（筑摩書房・1955年刊）の可愛らしい児童書まで。並べた本は図書室の蔵書全部ではないし、図書室に未蔵の本がまだまだあることを考えると、近藤さんの本が登山の世界に与えた影響の大きさに改めて驚かされた。

さて図書交換会の出品本の中で

一番申込みが多かった本は、10月に亡くなったばかりの田部井淳子会員のサイン本『七大陸最高峰に立つて』（18名）。出品者にとっても、田部井さんの死は予想もしなかったことであろう。心よりご冥福をお祈りしたい。

そして続くのが文庫『山の道』（宮本常二）・『本のある山旅』（大森久雄）・『山のABE』（あべみつこ・安部和夫）・文庫『山の神』（吉野裕子）・『廊下と窓』（冠松次郎）・『KARAKORUM』（SHIRO SHIRAHATA）。山岳名著・古典と言われていた本は『廊下と窓』のみ。古書の世界にも時代の流れを感じる。

入札本は冠松次郎の『日本アルプス登山案内』に5010円、『季刊・銀花 畦地梅太郎』に5000円の値が付いた。静岡支部の長田会員からは、今年もミカンの差し入れがあった。

なお例年、図書交換会へ本が出品されてから会員の皆さんに目録を公開する前に、一部の本を図書室の蔵書として予算で購入している。出品本の中から、図書室に未蔵の本でぜひ蔵書に加えたい本を図書委員会で検討して購入手続き

を行なっており、今年は27冊を購入したことを報告する。

（三好まき子）

山行委員会

八方尾根スキー懇親会に参加して

今年度のスキー懇親会が1月22日から24日の2泊3日で北アルプスの白馬・八方尾根で行なわれました。東京から6、千葉から1、埼玉から2、横浜から1、名古屋から2、岐阜から1、海外から1、そして山行委員3の総勢17名が参加しました。

1月初めのゲレンデ情報では、スキー場の下部で雪がほとんどなく心配しましたが、以後少しずつ降り始め、20日からは日本海側に被害も出る大雪になりました。私たちスキーヤーにとってはうれしいことですが、被害に遭われた方たちには心からお見舞いを申し上げます。残念ながら23、24日の両日も天候が芳しくなく、風、そして視界不良状態で、参加者全員が滑ることはできませんでした。しかし、私にとっては40年ぶりの「八方」での新雪（深雪）のス

寄付金及び助成金などの受入報告 (平成29年1月まで)

寄付者など(単位千円)	金額	寄付の目的、その他
富士電機株式会社	50	高尾の森づくりの活動
アサヒビール株式会社	100	高尾の森づくりの活動
株式会社エリオニクス	100	高尾の森づくりの活動
株式会社 三井住友信託銀行	200	高尾の森づくりの活動
電源開発株式会社	100	高尾の森づくりの活動
伊藤ハム株式会社	50	高尾の森づくりの活動
コニカミノルタホールディングス株式会社	200	高尾の森づくりの活動
国土緑化推進機構	2,560	高尾の森づくりの会・ラオス友好の森造成活動 28年度計画着手金
国土緑化推進機構	540	高尾の森づくりの会・三宅島緑化再生活動
メタウォーター株式会社	100	高尾の森づくりの会・気仙沼大島復旧支援活動
独立行政法人 青少年育成機構	3,333	家族登山普及WGウェア・サイト制作助成金 平成27年度分残金
独立行政法人 青少年育成機構	5,200	家族登山普及WGウェア・サイト制作助成金 平成28年度分概算払金
中谷 康司 会員	50	ユースクラブと青年部へ
山田 和人 理事	50	法人運営費用として
吉川 正幸 理事	35	法人運営費用として
栃木支部会員33名 (別途報告)	468	栃木支部創立10周年記念募金



スキー懇親会宿泊前での記念撮影

スキー滑走でした。夜の懇親会では火山の活動予知、そのほかいろいろお話があり、興味深くお聞きすることができました。火山爆発予知の話題の中で、登山者の自己責任のこと、そして社会的事情での予知の難しさのことなどは大変興味深く伺うことができました。

しかし、スキー懇親会の参加者は毎年同じようなメンバーで、新しい人たちの参加が少ないようにでした。ただお酒を飲んで話すだけでなく、スライドショーをしたり、

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

群馬支部

4支部合同懇談会を開催

2月18(土)～19(日)、群馬県富岡市の妙義山を間近に望む妙義グリーンホテルで、栃木・千葉・茨城・群馬の4支部による合同懇談会が開催された。この合同懇談会は栃木、茨城、千葉の3支部合同懇談会として始まり、今年で10回目。平成25年に設立された群馬支部が途中から加わり、今回は初めてホスト役として群馬で開いた。

1日目は群馬支部の田中壯佑支部長の開会挨拶に始まり、各支部

ひとつのトピックを決めて話を全員でするといったことができれば、新しく参加される人もあるかもしれません。

海外に住んでいると、日本山岳会の行事に参加する機会もほとんどなく、今回は年次晩餐会、記念

山行、東京多摩支部の麻生山へのハイキング、そしてスキー懇親会と、大変楽しい時を過ごさせていただきました。最後に、このスキー懇親会を準備してくださいました山行委員の皆様にお礼申し上げます。(海外会員・小笠原毅)

活動報告などの後に講演会が行なわれた。講演会では、まず群馬県太田市の生まれで、日本山岳会第3代会長の本暮理太郎の人物像をテーマに、その足跡を緻密に研究している太田市の宮澤正樹さんが、一般にはあまり知られていない一面なども交えて語った。

引き続き日本山岳協会会長の八木原啓明さんが、「群馬のヒマラヤ登山」と題して、自らが関わってきた群馬のヒマラヤ登山の歴史を、ときに熱く、ときに淡々と語りかけた。結果として、「静と動」という登山史の大きな流れを対比



神成山山頂での参加メンバー

させての講演会となり、印象深く意義深いものになったのではないだろうか。

夜の懇親会は、八木原さんの乾杯に始まり、杯を重ね、交流を深めた。余興として群馬名物の「上毛かるた」を支部対抗戦で行なったところ、予想以上にヒートアップ。さらに飛び入りの出し物なども連続しての大盛り上がりで、交流はさらに二次会へと続いていった。

2日目は、山行と観光に分かれて行動した。山行班は富岡市西部の神成山へ。標高300mを少し超える程度の低山だが、富岡アルプス、「神成九峰」とも呼ばれる連峰で、ミニ縦走気分も味わえる。澄み

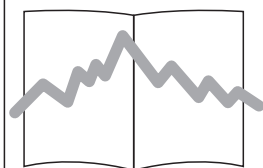
切った冬空の下、上毛三山から西上州の山並みなどすばらしい展望に恵まれ、ハイキングを楽しんだ。

観光班は世界遺産の富岡製糸場へ。日本の近代化を支えた製糸場をガイド付きで見学した。製糸場の後は、群馬名物コンニャクのテーマパークにも立ち寄った。

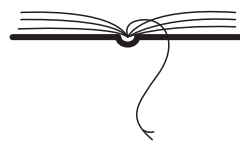
合同懇談会には合わせて54人が参加した。4つの支部のほか、地元で木暮理太郎の顕彰活動が続けている「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の服部会長、浅海事務局長らも参加した。語り継ぐ会の協力で講演会場には木暮理太郎に関する資料も展示され、参加者は興味深そうに見入っていた。

群馬支部が誕生してから、つまり4支部が揃ってからまだ4年と、この4支部の歴史は浅い。しかし、こうした支部懇を通して交流の輪が広がり、ブロックとしてのまとまりが固まりつつあることを実感してきたが、今回の支部懇でその感をいっそう強くすることができた。お集まりいただいた各支部の皆さんに感謝申し上げるとともに、今後、ブロックとしてのより幅広い交流が進むことを期待したい。

(根井康雄)



図書紹介



大野 崇著

Massif du Mont-Blanc
モン・ブラン山群Ⅱ
Monochrome (2009年)
Massif du Mont-Blanc
モン・ブラン山群(2008年)



2016年11月
山と溪谷社 80分
29.7×21cm
2800円+税(Ⅱ)

山岳写真家・大野崇氏によるモン・ブラン山群の写真集。大野氏は、学生時代に見たガストン・レビュファの映画や著作によってアルプスに魅せられ、山岳写真を志すようになったと述べている。近藤等氏により紹介されたレビュファの作品では、その鮮烈な映像美に心を震わせたものだが、若き大野氏もそのひとりだったのだ。こうした経緯からは、大野氏の

活動の原点にレビュファがいたことが分かるが、レビュファはアルプスの山々のなかに「美」を見つけることに巧みであった。そして、そこに詩情を求めた。それらの山岳美を、言葉とともに映像で表現しようとしたが、その際、とりわけ撮影のアングルにこだわったことが指摘される。同じ対象でも、アングル次第で撮影効果に驚くほどの変化が生まれる。実際、レビュファが撮影した場所に行つて現場を見ると、それこそ何気ない岩塔が映像の中で永遠の造形に仕立てられていることを知って、その妙に驚くことがよくある。レビュファは山行の最中に、そうした最上のアングルを探していたと言われるが、卓越したアルピニストであったればこそ、オリジナリティ溢れる映像美を見つけ出すことができたのだ。

レビュファを敬愛する大野氏は、自身もまたアルピニストである。毎年アルプスを訪れ、クライミングをし、そして撮影する。大野氏も、実際に自らが登ることを通して、アルピニストでしか見つけられない絶好の撮影ポイントを選んで、そこに、ほかでは得られない発見がある。日本の著名な山岳写真家でも、実はロープウェイ駅の側でしか撮影していなかったりするものだが、この違いが大野氏ならではの斬新なイメージを創り出すことを可能にしている。

しかも、大野氏は自分で撮影する。これがレビュファと違う点だ。レビュファは、自分の求める映像を撮影してくれるカメラマンを、ほかに必要とした。それが、ジョルジュとピエールのテラ父子やルネ・ベルナデといった撮影スタッフであつて、彼らが同行し撮影を行なったのだ。確かに、それは絶妙なコンビであったことはほとんど伝説化しているが、やはり自分で撮ることの意味は大きい。アルピニストと写真家の二つの資質を合わせ持つことが、大野氏の強みとなっている。

最初の写真集『モン・ブラン山

群』では、時間や季節により様々に変わる山の表情が、何より印象的な色彩の変化を通して表現されていたが、今回刊行された『モン・ブラン山群Ⅱ』は、モノクロームの作品を集めたものだ。「山岳写真の原点に立ち返り、光と影を巧みに使つて表現」しようとしたと、その意図が記されているが、実際、その先鋭な映像には息を呑むものがある。アルプスのピークは、日本の山のおおやかなシルエットと違って、まさにゴツゴツした岩と氷だ。であればこそ、岩と氷の織りなす構成的な美の重層性を際立たせるには、かえつてモノクロームの光の陰影が適していたことを、1枚1枚の作品が強烈な説得力を持つて主張している。そのリアルな表現性によって、大野氏の審美的感性の確かさが証明されたといつてよいだろう。

両写真集ともブックデザインは小泉弘氏が担当しているが、ふたりのコラボレーションが見事に成功していることも見逃せない。特に今回の撮影ではデジタルカメラが使用されているが、デジタル写真技術の進歩ゆえにこそ、それだけオリジナルな工夫が求められてしか

「ヒマラヤ登山の動向と将来」から始まり、本多勝一、小西政継、奥

本書は1958年に「より高くより困難な、そしてより美しく、より新しいものへの理念をより上げる」ことを掲げて創刊され、1995年、第169号を最後に休刊となった山と溪谷社『岩と雪』のダイジェスト版だ。1972年、第24号から編集部に配属され、1977年から休刊まで18年間、編集長を務めた池田常道氏により編選されたベストセレクションとなっている。

内容は、第1号に掲載された、早稲田大学山岳部出身で日本山岳会理事でもあった山崎安治氏による「ヒマラヤ登山の動向と将来」から始まり、本多勝一、小西政継、奥山章、松本龍雄、古川純一、坂下直枝、戸田直樹、原真、山野井泰史、平山裕示、草野俊達ほか日本のアルピニズムを牽引したクライマーや登山家らの文章で構成され、日本の登山史に影響を与えた記録と思想を知ることのできる貴重なもの。ほかにも新たに書き下ろされたコラムや、バックナンバーのタイトルが略年表と表紙写真とともにまとめられ、全体を俯瞰できる構成だ。

一方、創刊時から「世界的視野における編集内容が主軸」と積極的に掲載してきた海外の記録については、版權処理の都合で多く割愛したというのは残念。創刊の辞に「登山とは登り、読み、かつ書くことの全てが総合されて成立するもの」とあるように、歴史的なエピソードを築いてきた先人たちは、精神性や身体技能とともに自己を位置付ける歴史認識を備えている。本書は、これらを引き継ぎ、さらに高みを目指す若い人たちにこそ読むべきだが、記事とともに同時代を生きた人々にとっても、熱い思いをリアルに思い起こすことのできる一冊だ。

(恩田真砂美)



2017年2月
山と溪谷社
B5判 335頁
2800円＋税

岩と雪ベストセレクション

池田常道編

るべき状況にある。その点ここでは、モノクローム映像に関するデジタル処理上の工夫が様々に凝らされていると聞いた。デジタル写真の新たな可能性を切り開くものと言えよう。

(飯田年穂)

図書受入報告(2017年2月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
C.ギャラード(著) 中田修(訳)	世界最悪の旅	761p/22cm	オセアニア出版	2017	訳者寄贈
井上みやこ	山の向こうに : 南アルプス登山奮闘記	239p/21cm	井上みやこ(私家版)	2016	著者寄贈
萩生田浩	山のかたみ	178p/20cm	西田書店	2005	著者寄贈
萩生田浩	山と過ごした一日	222p/19cm	西田書店	2016	著者寄贈
長谷部忠夫	八十里越の道筋(改訂版)	101p/29cm	長谷部忠夫(私家版)	2016	著者寄贈
渡辺千昭	聖山 永遠のシャングリラ : 渡辺千昭写真集	131p/25cm	日本カメラ社	2017	中村保氏寄贈
川村匡由	脱・限界集落はスイスに学ぶ : 住民生活を支えるインフラと自治	199p/19cm	農村漁村文化協会	2016	著者寄贈
白井芳樹(監修)	暴れ川と生きる [通史編] : 常願寺川治水叢書	144p/26cm	北陸地域づくり協会	2017	発行者寄贈
三宅修	裏山の博物誌(新編)	320p/19cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
佐伯邦夫	追憶の山々	256p/19cm	山と溪谷社	2017	著者寄贈
南谷真鈴	冒険の書 : Living with Adventure	192p/19cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
山と溪谷社(編)	作家の山旅 : 紀行とエッセーで読む(ヤマケイ文庫)	358p/15cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
串田孫一	若き日の山(ヤマケイ文庫)	286p/15cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
鈴木正崇(編)	神話と芸能のインド : 神々を演じる人々	260p/19cm	山川出版社	2008	編者寄贈
鈴木正崇(編)	森羅万象のささやき : 民俗宗教研究の諸相	998p/22cm	風響社	2015	編者寄贈
鈴木正崇	ミャオ族の歴史と文化の動態	558p/22cm	風響社	2012	著者寄贈
寺田鎮子	ネパール文化探検	182p/21cm	寺田鎮子(私家版)	2014	鈴木正崇氏寄贈
郷土文化史研究所(編)	鳥海山麓 遊佐の民俗(上巻)	588p/21cm	遊佐町教育委員会	2006	鈴木正崇氏寄贈
郷土文化史研究所(編)	鳥海山麓 遊佐の民俗(下巻)	395p/21cm	遊佐町教育委員会	2006	鈴木正崇氏寄贈
東工大山岳部(編)	東京工業大学山岳部ヒマラヤ遠征隊1970 遠征報告書	219p/25cm	東工大山岳部	1973	鈴木正崇氏寄贈
D MacDonald et al. (eds.)	The American Alpine Journal 2016 (Vol.58 Iss.90)	400p/23cm	AAC Press	2016	発行者寄贈



平成28年度第9回(2月度)理事会 議事録

日時 平成29年2月8日(水)19時00分～21時05分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣監事
(所用のため平井監事は審議事項2まで欠席)

【欠席者】山田副会長

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・高額の寄付金及び助成金の受け入れについて

高尾の森づくりの会、家族登山普及委員会それぞれの寄付金および助成金の受入れについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

2・プロジェクトチーム等の廃止について

110周年記念事業実行委員会、マナスル初登頂60周年事業ワーキンググループ、ネパール大地震救援ワーキンググループを事業終了のため、ルーム検討ワーキンググループを活動の予定がないため廃止することについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

3・表彰規程の制定について

会長特別表彰規程に一般表彰を加え、新たに表彰規程として制定することについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

4・日本山岳会上高地山岳研究所管理規程の一部改正について

準会員制度の導入に伴い、関連する条文を改正することについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

5・日本山岳会上高地山岳研究所利用要領の一部改正について

準会員制度の導入に伴い、関連する条文を改正について審議したが、支部会友の取扱いについて再検討の必要があり、審議を継続することとした。(賛成14名、反対なしで継続審議)

6・秩父宮記念山岳賞実施規程の一部改正について

秩父宮記念山岳賞の発表時期の明記とともに、条文の構成を見直すことについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

7・会章等の使用に関する規程の制定について

会章等の使用に関する規程の制定について審議したが、会章の形状等について詳細な表示を要するとし、審議を継続することとした。(賛成14名、反対なしで継続審議)

【協議事項】

1・会員からの「役員選考等に関する意見」への対応について役員選考に関する提案の申し出を受け、理事会としての対応について協議した。(佐藤)

2・日本山岳会上高地山岳研究所の増収策について山岳研究所運営委員会策定の増収策を協議した。(大槻)

【報告事項】

1・1月受付分の入会希望者13名、準会員入会希望者8名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2・谷口けい冒険基金の後援名義使用許可を行なったとの報告があった。(佐藤)

3・世田谷文学館企画展からの協力名義使用申請について、これを許可したとの報告があった。(佐藤)

4・北日本新聞開発センターからのウェストンの写真画像の使用申請について、これを許可したとの

報告があった(神長)

5・(株)JTBパブリッシングからの「日本三百名山」名称使用申請について、これを許可したとの報告があった。(神長)

6・毎日映画社からのナンダコート初登頂80周年記念事業への後援名義使用申請について、これを許可したとの報告があった。(神長)

7・日本山岳ガイド協会からの「安全登山のための知識と技術公開講座」に対する名義後援使用申請について、これを許可したとの報告があった。(佐藤)

8・16件の寄付金および助成金の受け入れについて報告があった。(吉川)

9・3月4日(土)～5日(日)に開催される第5回登山教室指導者養成講座の実施要項について報告があった。(大久保)

10・1月28日(土)～29日(日)に開催された第12回ボルダリングジャパンカップの状況について報告があった。(落合)

11・3月9日(木)に開催される平成28年度第3回評議員懇談会について報告があった。(佐藤)

12・2月16日(木)に開催される医療委員会主催講演会について報告があった。(野口)

あった。(野口)

13・「山」の發送および封入物について報告があった。(神長)

14・「山」2月号の発行予定について報告があった。(節田)

【連絡事項】

1・日本・ブータン友好協会第37回通常総会 2月25日(土) 14時～15時30分 早稲田大学15号館02教室

2・第5回小島鳥水祭 4月8日(土) 高松市

【今後の予定】

1・次期理事会等

3月度常務理事会 3月7日(火)18時30分 集会室

3月度理事会 3月14日(火)19時00分 集会室

平成28年度第3回評議員懇談会

3月9日(木)15時～ 104会議室

2・事業計画・予算等

平成29年2月28日(火) 平成28年度事業報告(提出期限)

平成29年3月31日(金) 平成28年度会計報告(提出期限)

平成29年6月24日(土) 平成29年度通常総会(主婦会館プラザエフ)

以上

会員異動

物故

篠田 一郎(4345) 17・1・20

西牧 康(4360) 17・2・4

高倉 信孝(7814) 15・11・21

高田 春男(10788) 16・7・25

船村 徹(14674) 17・2・16

退会

永沢 栄(7957) 信濃

水谷 仁(8574) 首都圏

斉藤 直信(9274) 東京多摩

堀江 昇(9970) 群馬

樋口 公臣(10575) 首都圏

東海 林敬(11517) 山形

立澤 延公(12071) 信濃

寺井 政二(12363) 北海道

林 順一(12538) 山陰

澤田 良一(13355) 千葉

馬淵 成美(13619) 首都圏

井上 禎子(14259) 首都圏

野田 耕司(14393) 広島

遠藤 俊博(15909) 埼玉

下起 始(12241) 信濃

高畠 聡(13680) 首都圏

ルーム日誌 2月

1日 常務理事会 山行委員会

総務委員会

2日 山行委員会 図書委員会

YOUTH CLUB

総務委員会

スケッチクラブ

理事会 休山会 山想倶楽部

フォトクラブ 山岳地理ク

ラブ 九五会

公益法人運営委員会 緑爽

会

スキークラブ スケッチク

ラブ

山岳研究所運営委員会

青年部 三水会 つくも会

SUN燦会

科学委員会 YOUTH

CLUB みちのり山の会

総務委員会

山の自然学研究会

資料映像委員会

スキークラブ

自然保護委員会 麗山会

フォトクラブ

学生部 山遊会 01会

総務委員会 YOUTH

CLUB 緑爽会

支部事業委員会 YOUT

H CLUB

デジタルメディア委員会

「山の日」事業委員会 遭

難対策委員会 2月来室者 460名

年会費の預金口座振替のお知らせ

会費の支払いを預金口座から自動引き落としにされた会員と準会員の方から、平成29年度の会費、準会員会費は、4月27日にご指定の預金口座から引き落としさせていただきます。ご自身の預金口座残高のご確認をお願い申し上げます。

特に、青年会員(年齢26歳未満の通常会員)の年会費は、昨年の総会決議によって平成29年度から、準会員会費と同額の6000円になりましたので、ご注意ください。

まだ会費の預金口座から自動引き落としにされていない会員の方には、毎年の会費の振り込み忘れを防ぐために、預金口座振替の手続をするようお願いいたします。郵便貯金からの振替も可能です。手続きのための届け出用紙を紛失された方は、本部事務局まで、ご連絡ください。

◆登山リーダーのための「救急救助講習会」
 山行委員会／遭難対策委員会
 登山リーダーが習得しておくべき「救急救助」に関する知識・スキルなどについて、実技中心に学びます。会員はもとより、会員外の方々の参加も歓迎します。
 日時 6月18日(日)10時～17時
 場所 立正大学品川校舎(JR大

講師 崎駅より徒歩七分
 恵秀彦会員(遭難対策委員
 会)
 定員 30名
 費用 500円
 申込み先 山行委員会・高橋努
 TEL 090-2906-4356
 E-MAIL sanko@jac.or.jp
 *参加者に詳細を案内します。

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆越後の山々 権現堂山と鋸山

山行委員会

雪解けとともに咲く花々や越後三山の展望台で知られる、権現堂山を縦走します。もう一山は、遙か日本海に浮かぶ佐渡をも望む長岡の鋸山です。アクセスの難しい山々へ、チャーターバスを使って訪れます。温泉も期待しましょう。

集合 5月28日(日)午前7時10分

(厳守) 小田急線新宿駅西口

解散 29日(月)午後8時30分ごろ

小田急線新宿駅西口

行程 28日 鋸山(3時間30分)、

29日 権現堂山(5時間30分)

費用 3万円(交通費、宿泊費、懇

親会費、傷害保険料、雑費)

申込み 5月8日(月)までに

植木淑美

FAX 042-734-11498、

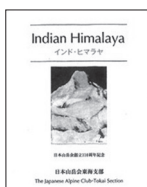
または E-MAIL sanko@jac.or.jp

*緊急時連絡先と生年月日を西暦で必ずお知らせください。

◆花の山旅・大雪山と富良野岳

山行委員会

北海道支部の協力を得て、花の大雪山と富良野岳の山旅です。健脚の方は大雪山の縦走、花鑑賞の方は黒岳往復のコース選択ができます



2015年12月発行
A5判上製 658頁
6000円＋税

『インド・ヒマラヤ』購入のご案内
110周年記念出版された日本山岳会東海支部編纂による『インド・ヒマラヤ』が、まだ多少の残部があります。インド・ヒマラヤの全貌が分かる、650頁を超える貴重な大冊です。購入ご希望の方は、ぜひお買い求めください。
本書は、東部カラコルム、カシミールからガルワール、シッキム、アッサムまで東西約1000kmに広がるインド・ヒマラヤ全域を13の山域に大別し、そのすべてに山の概要、概念図、解説が付いた、まさにインド・ヒマラヤの集大成です。特に、日本隊を

中心に主要な登山隊の記録が多数掲載されており、生きた登山史として、また随想や探査記録も興味深く、変化に富んだ構成になっています。巻末には、自然、社会、歴史、探検、登山との関わりを考察した解説も付き、読みものとしても興味深いものとなっています。
執筆者は、沖允人さんを中心にしたインド・ヒマラヤの精通者、約30名が担当し、東海支部が総力を挙げて編集に当たりました。
ナカニシヤ出版のご厚意により、JAC会員に限り2割引、送料サービスで購入できます。購入方法は、直接ナカニシヤ出版、TEL 075-1723-0111、FAX 075-1723-0095まで。

す。最終日は北海道支部ルームで懇談の場も持ちます。申込み後、航空券(早割等)確保をお願いします。
日程 6月30日(金)～7月3日(月)
集合 30日(金) 層雲峡16時30分
(当日は層雲峡泊)
行程 縦走班《黒岳ロープウェイ―黒岳―旭岳―姿見―白金温泉》 周回班《黒岳ロープウェイ

イ―黒岳(周回)―層雲峡―白金温泉―泊―登山口―富良野岳(往復)―札幌―泊
歩程 1日縦走班8時間(健脚向き)、周回班4時間(一般向き) 2日6時間(一般向き)
費用 3万3000円(宿代・城内移動車両費用・保険料等)。
*ほかに航空券等各自手配

定員 15名
申込み 5月1日(水)までに長島泰博へ TEL 090-555541
8345 sakko@jac.or.jp
*傷害保険用に生年月日を付加。
◆医療委員会主催・第2回景信山メディカル・ハイキング
―実地で学ぶ山の医療―
山中で足が攀った、虫・ハチに刺された、足首を捻挫した、膝痛・腰痛などの対処法を指導し、携行医薬品の紹介をします。今回は有害植物に詳しい亀谷行雄講師も参加し、ウルシなどの有毒植物の識別指導を行います。知りたい山の医療全般についても講師野口、秦、浜ほか)にお尋ねください。
日時 5月20日(土)
場所 景信山
集合場所と時間 JR高尾駅北口 改札を出た付近に8:30
参加費 1000円
募集人数 20名(会員外も可)
申込み yamainyou@yahoo.co.jp
FAX 042146312871
氏名、会員番号、連絡先、住所を記入 テキストは『山の病気とケガ(野口いづみ著)』
*詳細は申込み者に連絡します。

◆編集後記◆

●今号の巻頭は例月とイメージを変えて、講演会をダイジェストで再録してみました。永年の登山人生で、多くの皆さんが膝痛に悩まされたことと思います。登山者にとって最大の関心事であるこのテーマを、講演会の来場者しか聞けないことというのは、真にもったいないこととして、医療委員会にご無理を申し上げて掲載できました。
●実は私も膝痛には悩まされました。大学山岳部時代に重荷を背負って長期間歩き回ったのに始まり、半世紀もの間、膝を酷使してきたツケが後年、表れました。それ以来、ストックを愛用していますが、初めて買ったLEEKIのストックは、石突が完璧になくなっていきます。あたかも膝の軟骨が磨り減ったように……。
(節田重節)

日本山岳会報 山 862号

2017年(平成29年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社